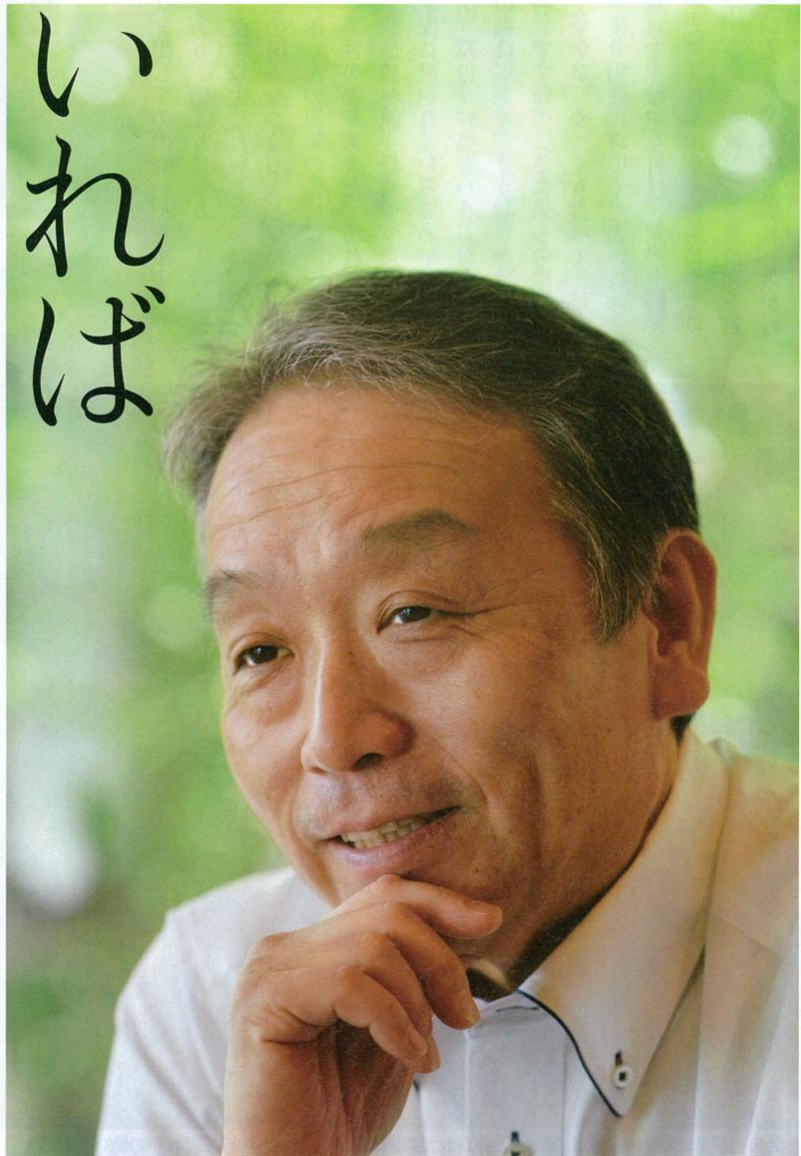


賀川豊彦の心を 受け継いで

長年にわたるホームレスの支援活動で、自立した人は三千人近くにのぼる。友愛の精神で救貧活動を展開した社会運動家、賀川豊彦の志に通底するとして、今年、第一回賀川豊彦賞を受賞した。活動の柱に据えるのは、困難を抱える一人一人に寄り添い、新たなまきなを育むこと。人は出会いによって変わることを、確信しているからだ。

写真●タカオカ邦彦

生きていれば
いつか、きつと
笑う日が来る

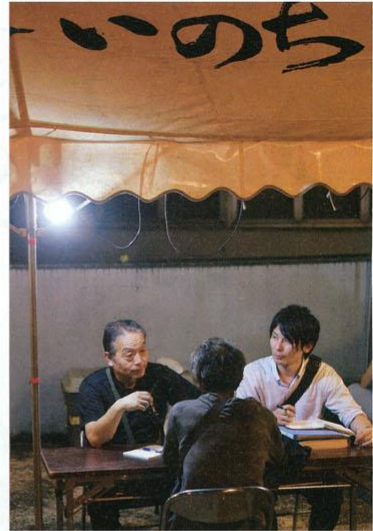


福岡県北九州市 認定NPO法人抱樸^{ほうぼく}理事長
奥田知志さん

生きておっくれ

辺りが暗闇に包まれた夏の夜、公園の一角でテントの明かりが灯る。「おんなじいのち」と文字の入ったテントに、五十人ほどの列ができる。その多くが住まいのない路上生活者、いわゆるホームレスである。机の上には用意されているのは、手作りの弁当と豚汁、衣類やタオルなど。ボランティアが一人一人に声をかけながら手渡していく。

北九州市の中心地、小倉。繁華街からほど近い公園で、認定NPO法人抱樸が定期的に炊き出しを実施している。理事長である奥田知志さん(54)は、長年にわたってホームレスの自立支援に携わってきた。



炊き出しを知って、すぐる思いでやってきた男性。1週間後に路上生活から脱出した



団体名の抱樸は、原木をそのまま抱き、抱かれた原木がやがて道具となってだれかの助けとなるという意。きずなの社会が必要だと語る



年間 30 回以上の炊き出しの物資の多くは協力者・団体の提供によるもの



抱樸館北九州には約 30 人が入居する。生活のリズムをつくり、共同生活でひとのきずなを回復する

わたしたちは、きずなを失った 人たちの「ホーム」になりたい

の十日間、水しか口にしていないこと……。過酷な日々を、言葉をとぎらせ、かすれた声で話す。奥田さんが「死のうとしたやろ」と発すると、首を縦に大きく振った。

「今日すぐには住まいを用意できないけれど、かならず、あなたを助ける。だから、二つの約束を守ってほしい。明日、わたしの携帯電話に連絡すること。もう一つ、これがいちばんだいじなこと、どんなにつらくても生きておってくれ」

奥田さんはそう言って、自身の携帯電話の番号を記した紙と、テレホンカード、いくらかの現金を渡した。男性が立ち上がるうとしたときだつた。七十代のボランティアが駆け寄り、男性の手を両手で強く握り締めた。

「自分もこのあいだまで、ホームレスだった。それでも、はいあがつてきた。だから、あなたもはいあがれるはずだ。いっしょにがんばろう」ボランティアは男性の手を、何度

も握り締める。男性にとって、久しくなかったであろうひとの手のぬくもり、そして目の前で本気で自分を心配してくれる人がいること。男性は涙ぐんで公園を後にした。

関係を切らさない

滋賀県大津市のサラリーマン家庭に育った奥田さんは、中学二年生になった。事前に家族に相談したさいの父の言葉を忘れてはいない。

「おまえの人生なんだから、自分で決めなさい。そして、最後まで責任を果たしなさい。以来、「自分の人生」を、つねに意識してきた。

大学を卒業後、二十六歳で北九州市の東八幡キリスト教会の牧師に。

ホームレスの支援活動を、数人のボランティアと共に始めた。深夜、路上で生活する人におにぎりを配り、一人一人の事情を聴く地道な活動だ。「こんばんは。だいじょうぶですか」。そう言って、路上で寝ている人の傍らに座る。「うるさい、うっとうしい」「放つといってくれ」。ときに、そんな言葉を浴びせられることもある。それでも、何度も訪ねて声をかける。「あなたのことを気にかけていますよ」というメッセージを送り続けるために。

「支援は、けつして一筋縄ではいきません。裏切られることもあれば、みずから命を断つてしまわれることも。自分たちの活動に限界を感じることもありました。でも、いつか、彼らの心に風が吹き、思いが届くときがある。それをキヤッチして支援をする。わたしたちのスタンスは、たとえ、どんなことがあっても関係を切らさないことなんです」

これまで三十年近くに及ぶ活動は、



ボランティアの仲間やスタッフたち。支えたり支えられたりする関係をたいせつにする

「路上生活のときは、毎日、死にたいと考えていた。笑う日が来るなんて思えなかった。それがいま、おれって、こんなに笑えるんだって思うようになりました」

さらに、奥田さんと共に小学校に

「だれも一人では生きていけない。自信を持って、そう言える」



炊き出しに来ることができなかったホームレスに深夜、弁当を配りにいく

約三千人ものホームレスの自立支援に結びついた。住まいや仕事の紹介、生活保護や自己破産の手続きの支援、資格の取得支援……。生活困窮者の共同住宅での六か月間の自立プログラムによって、ひととの関わりのおかげで、生活を立て直していく。

「ホームレスとは、たんに住む家がないことではなく、ホームと呼べ

るひととの関係やきずながとだえてしまっていること。孤立と無縁の状態です。だから、わたしたちはきずなを失った人たちの「ホーム」になりたいと考えているんです」

助けてと言ってほしい

「多くの支援の経験から、わたしが確信しているのは、人は出会いによ

って変わることができるということ。人が生き生きと変わっていく姿を見ると、よかつたなあと思いますよ」

奥田さんにとって、その象徴的な人が西原宣幸さん(68)だ。

西原さんは、母親が亡くなったことがきっかけで生活が乱れた。パチンコや競艇にお金を使い込み、五代後半でホームレスになった。共同住宅に入ることを勧められても、むげに断り続けていたという。

「それでも、抱樸の人たちが、来る日も来る日も会いに来てくれた。十年以上たつて、あるとき、なぜか『助けて』と口に出せたのです」

自立プログラムを経て、現在、共同住宅「抱樸館北九州」のスタッフとして、食事の配膳などの仕事をしている。さらに、ボランティア活動にも参加。支えられたことのありがたさが身にしみているから、支える側に回ったときの喜びはいつそう大きくなる。そして、まわりの人との笑顔の輪も広がる。

「路上生活のときは、毎日、死にたいと考えていた。笑う日が来るなんて思えなかった。それがいま、おれって、こんなに笑えるんだって思うようになりました」

さらに、奥田さんと共に小学校に



助け合いの社会へ

明治42年、賀川豊彦は貧しい人々が住む地域に移り住み、支援活動を始めました。人格交流を基にした助け合い運動で、そこから農民組合、購買組合など、今日の協同組合につながる組織の発展に寄与しました。

賀川は、社会の底辺に追いやられた社会的弱者の救済と、人と人が助け合う、平和で人間性豊かな社会を実現するための助け合い組織を推進しました。賀川豊彦賞は、賀川のこの志を現代に継承・発展させることを目的として創設しました。

第1回に受賞された、認定NPO法人抱樸の理事長・奥田知志さんの思想と実践は、まさに100年前の賀川の志を現代に継承し、実践するものとして、選考委員会で高く評価されました。

奥田氏と抱樸のみなさまの尊い活動が多くの人々により影響を与え、助け合いの志を抱く人々がさらに喚起され、よりよい社会の実現につながることを期待しています。

賀川豊彦記念松沢資料館
副館長・学芸員 杉浦秀典

おくだ・ともし

昭和38年、滋賀県大津市生まれ。東八幡キリスト教会牧師。平成12年、NPO法人北九州ホームレス支援機構を設立。26年に団体名称を「抱樸」に変更、同理事長。妻の伴子さんは同ボランティア本部の本部長。

寄付・物資の支援について

認定NPO法人抱樸では、支援活動をさらに充実するために寄付と物資（米、衣類、タオル、切手など）の提供を募っています。詳細は「NPO法人抱樸」ウェブページをご参照ください。

<http://www.houboku.net/>

●問い合わせ先（物資の送り先）

〒805-0015 福岡県北九州市八幡東区荒生田2-

1-32 シティコーポ七条1階

認定NPO法人抱樸 ☎093-653-0779

安心してできる「ホーム」に

奥田さんは、今年一月、第二回賀

出向いて、子どもたちに自らの立ち直った体験を伝える機会もできた。学校でのいじめや子どもたちの自殺のニュースに心を痛め、自分になにかできないかという思いからだ。奥田さんは言う。

「自殺する子どもの多くは、助けると言えずに死んでいく。大の大人がためらいなく助けてと言うことが肝心。『西原さんも言うって助かった。だから苦しいときは我慢しないで、助けてと言ってほしい。きつとだれか助けてくれるよ』というメッセージを送っています。助けてと言ったときに、助かったときとなるのです」

「自信を持って言えることがある。

「自分に、こう話すと言う。」

川豊彦賞を受賞（囲み記事参照）した。「自分の人生」を突き進ませてくれた父は、六月に亡くなったが、「最期にうれしい報告ができ、笑顔で見送ることができた」と言う。

来年は、支援活動を始めて三十年の節目を迎える。同志である抱樸のスタッフは百人を超え、活動の場も福岡市や中間市、山口県下関市、さらには東日本大震災の被災地にも広がっている。なによりボランティアの若者が増えていることが心強い。

だけれも一人では生きていけない。わたし自身もそうだから」
またホームレス支援で培ってきた言葉も投げかける。「生きていければ、いつかきつと笑える日が来る」と。これらのメッセージは、あの日、炊き出しで出会った中年男性にも、心の奥底に響いた。
「彼から、約束どおり電話が来て、一週間後には共同住宅に入りました。彼は自分自身が助かると実感したとき、泣き崩れました。生活再建の準備が始まって、まずは、就労に向けて体を健康な状態に戻すことから。栄養失調で抜けた歯があるから、早く歯医者に行かないとね」と話しているんです」
希望を見いだし、変わっていくホ

ームレスの姿を語るとき、奥田さんの笑顔は絶えない。柔和な表情と静かな語り口で、奥田さんは一人一人と真摯に向き合う。
きずなを失った人たちの、安心して暮らせる「ホーム」が、ここにある。

